

特 集

今、なぜ「貧困問題」か——古くて新しい課題

京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫

過日の『朝日新聞』（本年11月2日朝刊）によれば、今年8月の生活保護世帯は164万2238世帯で過去最高であることが報じられた。中でも65歳以上の高齢者世帯が84万世帯を越し、2007年以来、最多を更新し続けているという状況である。

今回の『人間福祉学研究』の特集テーマとしたのは「貧困問題」である。執筆予定者に対しては簡単な今回の特集についての「主意書」を送付した。その内容は、貧困の問題は古くて新しい課題であること、それへのアプローチとして多様な方法があることをお伝えした上で「現在、生活保護や社会保障の課題として、また児童、高齢者、そして地域の課題として様々な領域、そして国際的にも重要な問題となっています。人間福祉学においては人間と社会、そして福祉の関係性のもとで人間の幸福を考えていくという基本的なスタンスがあります。人間とその環境、とりわけ『社会』との関係を不断に問うていく必要があります。今回は幅広く多彩な角度からこの『貧困』という問題に関する特集を組み、『人間福祉』の課題にアプローチしていきたいと思っています」という特集の主意を認め、論文執筆の依頼をした。

「貧困問題」は古くて新しいと述べたが、「貧困研究」はその質、量ともに推移している。従来、貧困については、経済学や社会福祉の分野において論じられることが多かったが最近では社会学、政

治学、民俗学、宗教学、法学、教育学、ジェンダー、健康やスポーツ、精神医療からの視点等々、多様な分野から論じられている。それは貧困が時代的意味をもつ産物であると共に、現在の状況からしばしば疎外されている「人間」、あるいは「生活」「生存」という軸をもって、その本質を見ていく必要からの要請でもある。今回、特集を組むにあたって、このように様々な立場から貧困問題の課題についてお願いしたところ、全員の先生から玉稿を戴けた。

20世紀の終わり頃、日本はバブルの最中であり、社会福祉界では、「貧困」というものが消え去ったような印象があった。福祉学においても貧困問題は過去のものとなったような風潮もあった。しかし現状を見渡しても、高齢者や障害者、女性、そして子どもの貧困の課題は大きな社会問題として存在する。21世紀の今日でも「貧困」は顕現し、古来、福祉の中心的な課題として存在し続けてきた。もちろんそれは歴史のかつ地域、各国に様々な様相を呈している。そしてそれは今も全世界的な課題でもある。我々人間が生きている以上、何かの要因でもって生活困難の状況は襲ってくる。この生活という人間の基本的な「生」の有り様は、当然、「生活」「生存」という日々の営みを対象化していかざるを得ない。そしてそれを根源的に考えていくのが人間福祉の課題であると思われる。この課題は、人間のかけがえのない

人生、そのものへの問題であり、今後も不断に問うていくことが要求される。

福祉は往々にして、ソリューションを求めるあまり、本質的な課題に眼を向けることを怠る場合もある。もちろん解決に向けてのプロセスは大切で、その方法も大切である。しかし、現状認識とともに、物事の本質をきわめていくことがもっと

大切である。それへの科学的なアプローチがあつてこそ、正しい解決への道筋がみえてくる。人間福祉における「人間」と「社会」と「福祉」というキーワードを大切にしたいと思う。最後に本号の特集「貧困問題」について玉稿を戴いた先生方に対して、心より感謝を述べると共に、この課題がさらに深まっていくことの一助となればと思う。